



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵

令和五年十一月 第三百三十五号

今年の終わりに

年の瀬が近づいてまいりました。ベランダに吊るした干し柿も少しずつ干し柿らしくなってきました。みな様いかがお過ごしでしょうか。

私は、老いていく身体をなんとか支えながら、日々、不安と悩みの中で暮らしております。一日で消えてしまうようなどうでもいい悩みから、長年心にしみついている悩みまで様々ですが、少なくとも長い人生のなかで、不安や悩みから解放された時など、ほとんどなかったように思います。たとえ解放されたとしても、必ず新たな悩みが湧き出てきます。悩みばかり山積みしたまま人生を終えそうです。

振り返れば、人生の半分以上を仏教に触れながら過ごしてきました。仏教を通して「人間というのはどういう存在なのか」ということを学んできました。そして「人間とは」という他人事のような主語ではなく、「この私とはどういう存在なのか」ということを問いかける宗教であると学んできました。言い換えれば、「人間は四苦八苦して、最後には死ぬ存在である」という哲学から「ほかでもないこの私が、この世から消えていくのだ、そのことをどのように受け止めればよいのか」という宗教への転換です。

かつてお釈迦様は「人生は苦である。そしてそれを乗り越える道として八正道がある」とおっしゃいました。ちゃんと方法を示してくださっています。

八正道の一つに「正見」というのがあります。「正しく相手を見る」ということです。このために何世紀にもわたって修行が行われてきました。「正しく見る」とは自分の過去からの複雑な思いを消して、相手をそのままに見るということです。果たしてそんなことができるのでしょうか。その疑問から新たな仏教が生まれてきます。大乘仏教です。インド、中国から日本に伝わってきたのは、この大乘仏教です。

中国の善導大師は、「わたくし自身は、まことに身勝手に罪作りで、死を恐れ続けている哀れな人間であります。古来、ずっと悩みと不安にさいなまれ、そこから脱して安らかな人生を送る、そのきっかけを一切持てない私であると、確信いたします。」と語っておられます。救いようのない絶望的な言葉ですが、徹底的に自身を見つめた結果の彼の結論です。この絶望的な自分観察をもとに、新たな救いの大乘仏教が展開していきます。

私はといえば、不安と悩みの中から、なんとか小さな希望や生きがいを見出して生きていこうともがいております。つまり善導大師のように、徹底した絶望的な人間観を受け入れることができずにいます。絶望の向こうに広がる救いの宗教にたどり着けずに今を生きています。

ユダヤ人の話

連日、ユダヤのイスラエル軍によるガザ地区へのすぎましい攻撃が報道されています。ガザ地区でパレスチナの病院が襲撃され、多くの病人や市民、子供たちが無差別に殺されています。血まみれの泣き叫ぶ子供たちの姿を見ていると辛くなります。このガザ地区一帯はイスラエルによって高い塀に囲まれ、電気や水が遮断され、そこから脱出することもできず、まるで刑務所のような状態です。そこに住むパレスチナ人を惨殺しています。

ユダヤ人のことで最初に思い出すのは、ナチスドイツによって、六百万人もの無実のユダヤ人が、尊厳を奪われ、まるで虫けらのように大量虐殺されたことです。そして今、先月に発生した、パレスチナ人のハマスによるテロ行為に対する反撃として、パレスチナ人を攻撃しています。でも、今のイスラエル軍の攻撃を見ると、テロに対する報復を越えて、パレスチナ人すべてを絶滅させたがっているようにも見えます。こんな残酷なことをするユダヤ人とは、そもそもどのような民族なのでしょう。

昔、シリアからヨルダンまで旅した時のことを思い出しました。その後イスラエルへ入国しようとしたのですができませんでした。聞けば、いったんアラブ諸国へ入国した者は、イスラエルへは入国できないとのことでした。逆に、最初にイスラエルに入国すれば、その後アラブ諸国へは自由に入国できます。隣国士の国なのに、なぜそんなことになっているのか、とても奇妙に思った記憶があります。ユダヤ人の国という閉鎖的な存在。

映画「沈黙を破る」

先日「沈黙を破る」というドキュメンタリー映画を観ました。長年、パレスチナからのテロにおびえ、その不安から、銃武装した若きイスラエル兵が、一軒一軒パレスチナ難民の町をパトロールし、一般の民家を壊し、農地を奪い、若者を拘束し殺害する。その非人間的なことを日常的に行っているイスラエル兵たちの姿が映し出されます。そのことをイスラエル兵自身がどう思っているのか、沈黙を破って語る映画です。

「テロを撲滅すると言いながら、いったい自分は何をしているのだ。無実のパレスチナ市民を弾圧しているだけではないか」と、イスラエル兵が自らに問いかけています。具体的に普段どのようにパレスチナ人を弾圧しているのかの一端もわかり、衝撃的な映画でした。

そもそもユダヤ人はどのような歴史をたどり、そして彼らが信じるユダヤ教とはどのような教えなのでしょう。

選民思想

ユダヤ教の聖典である『旧約聖書』には、世界の創造の神であるヤーベがアブラハムと契約を交わし、神の祝福と意志を彼に伝えたと言われています。アブラハムは神に選ばれた民であり、その子孫がユダヤ人であると伝えられています。もちろん『旧約聖書』は神話の要素が多分にあり、史実とはどうい思えないのですが、ユダヤ人はそのこと

を信じています。そして彼らは、数千年たった今も、世界の他の民族に対し、優越意識を心の奥に持っていると言われています。「最も神に近い民族としての我々ユダヤ人」という意識。

しかし選民思想はユダヤ人に限らず、過去に「日本は神国である」と言ったり、漢民族は世界の中心であるという「中華思想」というものもありました。いろんな民族が優越意識を持ちたがるのは特別なことではないですが、ユダヤの選民意識は独特の歴史があります。

被害者意識

二千年近く前、古代ローマ帝国に滅ぼされ、住み家を失ったユダヤ民族は、世界中に離散してゆきます。領土を持たない彼らは農業ができず、金融によって生計を立てていきます。貨幣を貸し付けて利息を取るといって現在の銀行のシステムの元を造ったのもユダヤ人です。しかし、労働せずに利益を得るといってこの金融業は、キリスト教のヨーロッパでは卑しい仕事としてさげすまれ、ユダヤ人は不遇の地位を長い間、強いられてきました。『ベニスの商人』という小説では、ユダヤ人が典型的な悪徳高利貸し業者として描かれています。そのためヨーロッパのさまざまな国から追放され、流浪の生活を強いられました。そして究極の弾圧として、ナチスドイツによる大量虐殺という悲劇をもたらしました。それをきっかけに、悲劇の歴史を終わらせるために、イスラエルという国を建国するに至ります。ここまでがユダヤ人の苦難の歴史です。

パレスチナ地方のほんの片すみに領土を得た彼らは、その後、経済力を背景に、まず軍事力と政治力を強め、それまでこの地に長年住んでいたパレスチナ人を追い出し、中東戦争を経て、当初の何十倍もの領土に拡大していきます。

古代からずっと、世界中の国々から迫害を受けてきたユダヤ人は、その結果、まるで世界を信頼しなくなったように見えます。極論すれば、彼らが信用するのは、悲しいかな、ユダヤの神とお金と軍事力のみのように思えてしまいます。そして、ここから新たな問題、中東紛争がスタートしていきます。

「自らは善良で優れた民族なのに、世界はそのことを認めてくれない。それによって世界に対して不信感や恨みの気持ちが生まれる。」こうした心情をニーチェは「ルサンチマン」と呼びました。ユダヤ人を考えていると、この言葉を思い浮かべます。

不幸にも私にはユダヤ人の友人がいません。もしいたら、きつともつと違った見方になるだろうなと思います。

高橋和夫氏

日本における中東問題の第一人者で、放送大学の先生です。パレスチナに共感し、人生をかけて研究してこられました。私と同年配でもあり親近感をもっています。彼が先日テレビに出てとても疲れ切った表情で「人間というのは本当に愚かな存在ですね」と吐露しておられました。まるで「戦争というのは決して終わらない。」と語っておられるようでした。彼のたどり着いた結論のようで、聞いていて、言葉がありませんでした。

組織された宗教

長々とユダヤのことを書いてきました。あらためて、宗教というのは組織になったらどうしようもないなと思います。キリスト教だってイスラム教だって同じです。そして仏教だってそうです。日本にはたくさん仏教団の組織がありますが、教団という組織になったら、もうどうしようもありません。確かに組織がないと教えは伝わっていきかないのですが、宗教は本来、一人ひとり個人的な心を問題とします。組織になってしまふと必ず間違いを犯します。組織になってしまふと、必ず他の教団組織を非難するのが人間の常ですから。

【お知らせ】

☆ 築地本願寺合同法要のご案内

十二月二日（土曜日）昼十二時から、築地本願寺の納骨堂わきの東日本間におきまして合同の法要を勤修いたします。関係者の皆さまのご参詣をお待ち申し上げます。尚、集場所は、本堂正面の右側の受付周辺と致します。

【年回表】

一周忌	令和五年逝去の方	三回忌	令和四年逝去の方
七回忌	平成三十年	十三回忌	平成二十四年
十七回忌	平成二十年	二十三回忌	平成十四年

昔、なぜ中東へ旅したの？

目的の一つはヨルダン川の死海を見る、ということでした。観光写真に、水に浮かんで新聞を読んでいる人が写っていて、それがとても印象的でした。バスに乗り、すり鉢状の坂道をどんどん下って、地表から四百メートルほどの底へ降りていきます。周りは草木ひとつない砂漠で、まるで地獄に落ちていくような感じでした。そこに死海がありました。せつかくなので水につかって泳いでみたのですが、できませんでした。まさに死の海でした。

死海の向こう岸、ヨルダン川西岸では当時も紛争が続いていたはずですが、思えばずいぶん呑気な旅でした。

ホームページ <http://www.jyukushian.com>

みなさま 良い新年をお迎えください